

子ども達の新しい力
20年後の日本の未来の力
それは
思春期に繋がる赤ちゃんの敏感期の特別な力(脳科学)



<プロフィール>

日本女子経済短期大学卒業

千葉県立聾学校に勤務

結婚後は、東京都の区立保育園に勤務

区が認可する保育ママを8年間務め、現在は青少年育成
アドバイザーとして0歳児の保育をサポートしています。

青少年育成アドバイザー

元東京都保育ママ

池田優美子著

目 次

1. 子ども達の20年後の未来を見つめる…………… P4
 - ① AIによって変容していく社会
 - ② 日本の若者の考える力
 - ③ 保育ママの仕事によって赤ちゃんから学んだこと
2. 赤ちゃんの「心の発達」を促す誕生直後の脳…………… P5
赤ちゃんは育つ時期が用意され生まれてくる
3. 赤ちゃんの脳科学(誕生～6か月)…………… P6
科学者の研究を深く思考する
6か月までの赤ちゃんの能力
保育現場から訴える。未来の新しい力
4. 赤ちゃんの生涯に繋がる自己構築の芽…………… P8
自我の目覚めの方向性が確立する時期
5. 赤ちゃんの敏感期の力 参考文献…………… P9
6. 6か月までの「敏感期の赤ちゃん」の中に存在する大自然… P9
7. 「敏感期」は何の為にあるのか(保育現場から)…………… P10
8. 保育現場からの赤ちゃんの「敏感期」の体の成長と心
の発達の密接な関係性…………… P11
9. モロー反射を理解しながら心の方向性を形付ける… P11
10. 敏感期中(誕生～6か月)の赤ちゃんの心の発達… P13
11. 笑顔の構築(2か月・3か月)…………… P13
笑顔で心の扉を開く

笑顔を育む時の注意

12. 「愛」を育む「4か月～5か月半」…………… P14
13. 『ニューズウィーク日本版 2007. 7. 25』…………… P15
 - ・生後6か月までには脳内の回路が協調へ
 - ・米国立早期教育研究所
14. 思春期に繋がる赤ちゃんの「愛着」…………… P15
15. 感情は「愛着」の方向性を導く・生涯に繋がる… P16
 - 喜・怒・哀・楽の感情の土台は6か月間で育つ
16. 自律型愛着・脳科学に寄り添った育みによる「愛着」
構築されていく人格…………… P18
17. 依存型愛着『抱き癖を中心に育った時の心の発達に
「寄り添う」愛着』…………… P19
 - 構築されていく人格
 - 思春期にキレやすくなった時
18. 虐待型愛着『赤ちゃんの心の傷の将来』…………… P21
 - 懸念される将来
 - 愛着の形 構築されていく人格
19. ネグレクト虐待『無関心による放任』…………… P22
20. 敏感期の赤ちゃんは人格の原点…………… P23
 - 育っていく感情は人格を導きます
21. 終わりに 私がお伝えしたいこと…………… P24

1. 子ども達の20年後の未来を見つめる

(1) AI によって変容していく社会

子ども達は、時代の変革の中で未来の環境を受け入れて生きざるを得なく、職業を選ぶとき、現在とは比較にならない激化が予想されます。マーケットの変容は、必ずやってきます。失業を余儀なくする人々は増加し転換期がやってきます。高学歴であっても知識や論理だけでは、AIに勝てなく知識を使いAIにはない「切り開く」能力が求められるようになったり、各分野の職業に応じた専門性のあるAIには生み出すことができない「感覚的な気付き」や「知恵による判断力」「直感的な変容させていく力」など各々の職種による個性のある「新たな力」が浮き彫り化されていく時代が来るように思います。

(2) 日本の若者の考える力

知識によって自分の能力で自分の言葉で考える力、社会常識を超えて「ゼロ」から自分の思考によって独自のものを生み出す能力は、世界と比較して日本の若者は圧倒的に劣っているそうです。これから誕生し未来を生きる子ども達は、ますます国際社会で自立した発言が求められるようになり、誰かに従う集合体の意識から一人一人の発言が求められます。

日本も世界と地球を守ることをはじめとし共有しなければならないことが数多くあります。国際社会での発言は、日本を守るために必須です。それは、若者の問題として捉えるのではなく、育てていく私たち大人の問題として捉え、育てていく時間を踏まえての対応が求められます。

(3) 保育ママの仕事によって、赤ちゃんから学ばせて頂いてきたこと

私は、赤ちゃんの心は「愛」を理解する心を育みながら発達していくことを偶然赤ちゃんから教えられ学ばせて頂いてきました。育みの中で赤ちゃんの「莫大」な能力に気づかされたのです。

赤ちゃんの「脳科学と能力」は、広く社会に認知されてきましたが、それは、かつて私が保育現場で体験してきたことの後押しとなります。もう20年以上も前のことであり、脳科学の情報は全くない時代でしたが、私は赤ちゃんからどの子にも繋がる確かな力を受け取り、その時期、その月齢の大切さを保護者と共有する努力をしながら大切にしてきました。「毎年4月に新しい赤ちゃんを迎え、翌年4月に保育園に送り出す」という仕事であり、前年度の赤ちゃんの発達を忘れる暇もなく、次の赤ちゃんを受け入れることを繰り返していたことで、その時期にしかない赤ちゃんの驚くべき「大きな力」の数々を確信してきたのです。その力の大きさは、既に脳科学によって証明されていますが、実際にその力が保育現場で赤ちゃんにどのような作用をしているのか、私の体験をお伝えしたいのです。

誕生からの6か月間、どの赤ちゃんの中にも存在している「力」が、どんなに赤ちゃんの発達に大きな役割を果たしているのかをお伝えしたいのです。そして、赤ちゃんの時に引き出されたその力は、赤ちゃんの時に終わるものではなく回路網を育みシナプ

スを構築します。それは限りなく幼児期→児童期→青年期へと向かい、生涯にわたって影響する力です。

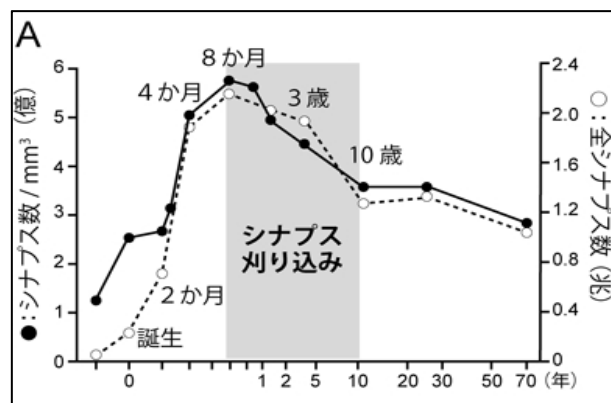
2. 赤ちゃんの「心の発達」を促す誕生直後の脳

シナプス(脳回路網)が人格を形成しています。

- ① 赤ちゃんの心はシナプス (脳の回路網)によって構築され、心は誕生直後から繋がって行きます。 < 乳児期→幼児期→児童期→思春期 >

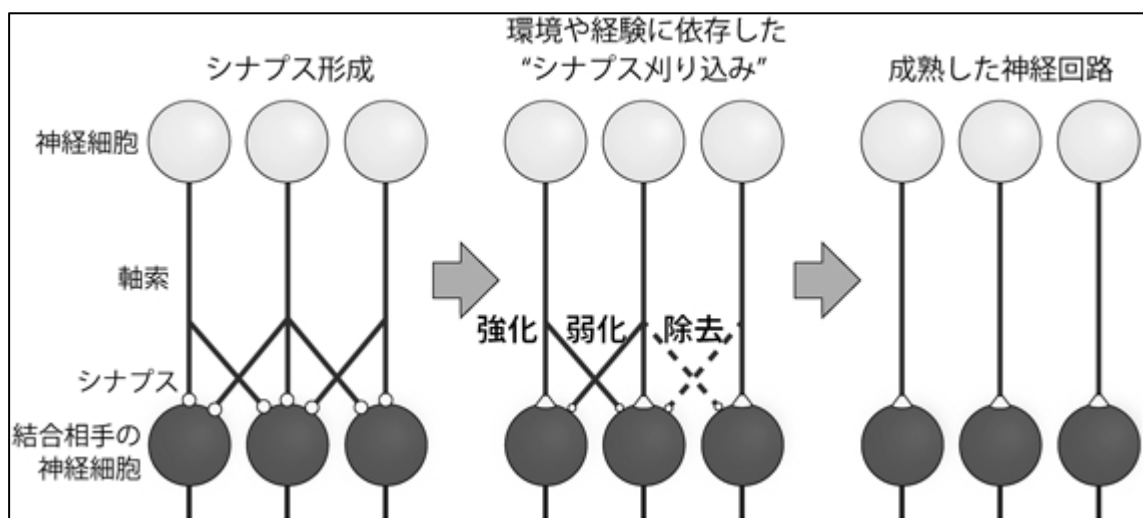
人の大脳皮質視覚野のシナプスの密度

(A)ヒトの大脳皮質視覚野のシナプス密度(●)と全シナプス数(○)の発達変化を示した(Huttenlocher, et al., 19825)より改変)。



『出典:2016 公益社団法人 日本生化学会』

生後発達期に起こる神経回路の再編成の概念図



出生直後に盛んにシナプス形成が起こり、その密度は成熟動物の神経系よりもずっと高くなる。その後、環境や経験などの外界からの刺激に対応して、必要なシナプス結合は強

化され、一方で不必要な過剰シナプス結合は弱められ、最後には除去される(シナプス刈り込み)。生き残った必要なシナプスだけが維持され、機能的でむだの少ない成熟した神経回路ができ上がる。『出典:公益社団法人 日本生化学会』

教育と脳・永江誠司・北大路書房より引用】

誕生直後の脳の重さ 男児 約 330g 女児 約 280g

6 か月 男児 約 660g 女児 約 560g 成人 1300g

【脳の仕組み・脳科学総合センター・高島明彦・日本文芸社より引用】

誕生直後の神経細胞は、絶縁体のようなもので覆われていなくむき出しの状態にあり、情報が伝わるスピードは 10 倍近く違う。

② 誕生直後の赤ちゃんの心は育つ時期が用意されて生まれてきま

すく敏感期

体は、母親の胎内でどの子にも自然の成長があり、順序よく成長し生まれてきます。

誕生してからはそこに心の発達に加わります。心も体の成長と同じように発達する時期と順序があり、その時期にその育みを試みなかったとき、その時に育めばいつときで育めたものが、幼児期になり何年も何年もかけて育みを試みても、その時に育んだように色濃く赤ちゃんの心の中に染み込ませることは困難になります。赤ちゃんの心を育てるとき、最も大切なことは、その心を育むための力が、すでに用意されてきていることを理解することです。その時期を脳科学では「敏感期」と呼ばれています。

赤ちゃんの心は繋がっています。
乳児期→幼児期→児童機→思春期
『シナプス』が人格を構築します。

3. 赤ちゃんの脳科学(誕生～6か月)

科学者の研究を深く思考する



6か月の赤ちゃんのサルの顔を見分ける能力

『イギリス.シェフィールド大学 オリビエパスカリス 東京女子医科大学 .乳児行動発達講座. 小西行郎』



「私たち大人が見分けがつかない猿の顔を6か月の赤ちゃんは一匹一匹一瞬で見分ける能力」があるという研究があります。

① 6か月までの赤ちゃんの能力

私たち大人は、猿の顔を見ても分類するに留まりますが、6か月の赤ちゃんは人の顔と同じように個々の違いを一瞬で認識することができるそうです。

私たちは、赤ちゃんが猿の顔をとっさに見分ける能力の偉大さを知っても実際の子育てとなかなか結びつきません。しかし、この赤ちゃんの鋭い能力からも分かるようにこの時期の赤ちゃんは、積み重ねていく学習というよりも環境を与える事で既にある能力が引き出されていくように感じます。

単純に保育現場での赤ちゃんとのやりとりから言いますと生後2か月から6か月の赤ちゃんの鋭い「観察力と直感力」、そして「集中力と記憶力」は、7か月以降の赤ちゃんより莫大な力があります。

しかし、6か月の終わりが近づいてくると赤ちゃんの遊ぶ手指の発達は、目に見えるスピードは消失され始め、積み重ねによる学習の発達へと変化していきます。生後45日頃から毎日夢中になり、面白く楽しそうにプレイジムで遊ぶ赤ちゃんを見守り「手指の発達」の観察を続けていると、赤ちゃんは前の日の遊び方を記憶していることで、脳の神経細胞を繋げていることがよくわかります。

6か月までの赤ちゃんは、3日経つと昨日までできなかった何かができるようになり、手指の器用さが僅かずつ変化し発達しています。6か月の終わりに近づくと急に発達が鈍化し、目に見える発達がなくなることで、その時が脳の神経細胞の刈り込みの作用の始まりであるような気が保育園現場ではしています。

この時、その後の赤ちゃんの発達を見つめていると6か月まで毎日のように楽しく面白くプレイジムで遊び続けた脳の神経細胞は繋がり、集中力や記憶力は、赤ちゃんがどのような人生を歩んだとしても赤ちゃんの人生を「益」へと向かわせる大きな「生きる力」となります。

② 保育現場から訴える 未来の新しい力

脳科学者の方々の猿の研究によって解明されてきた赤ちゃんの誕生直後の能力は、まさしく積み重ねではなく既にある能力が、赤ちゃんには備わっていることの証明です。

しかし、この能力は、いつまでもあるわけではなく「敏感期」と呼ばれている6か月間だけです。

赤ちゃんは、人は、誕生したとき「生きる力」を育むためにとしか考えられない特別な力が与えられていたのです。この力を時期を生かしてこそ、生きる力が、大きく構築され私たちが、人としての基盤となる土台を育むための力として、自然は、私たちにこの敏感期という大きな助力を与えたとしか思えない不思議な力であり、全ての人間に生涯でこの時期にだけ与えられた誕生直後の「偉大な力」です。

日本の若者たちの思考力は、この「敏感期の力」に寄り添い育てられることで、潜在意識の中に、自分の真ん中に「愛」が構築されその愛は傾きがなく「平ら」な愛となります。「愛」を中心とした「思考」は、これからの未来を「生きる力」として最も重要な力の一つとなります。

国際社会において 広い視野の「愛」による思考の方向性は、独自の「発想」を生み出していく力となり、それらを形にしていける「創造力の原点」となります。そして、若者達は自信を持つことで「発言力」を得て、同調圧力から脱し国際社会の一員となり、大勢の「若者の力」が「地球」のために参加できる、参加する日本を期待いたします。

4. 赤ちゃんの生涯に繋がる自己構築の芽

自我の目覚めの方向性が確立する時期（自我は愛着の方向性を司る）

保育現場からの「自我の芽」

私が初めに気づかされたことは、生後45日と90日の赤ちゃんの自我の大きさの違いです。

生後45日の赤ちゃんは、こちらの関わり方によって、まだまだ柔軟に自分を変えていくことができますが、90日の赤ちゃんは自分を変えない、変えたくない、変えることができない、という大きな「自我の芽(主に抱き癖)」が育っています。

赤ちゃんはたった45日間の僅かな日々の体験によって「自我の方向性の芽」を構築します。猿の顔を一瞬で一匹一匹判別するその「観察力と洞察力」によって、日常生活においては、保育者からの関わられ方に集中し、自分の思考の基盤を構築しています。同じような関わり方が三日間続くと、三日目の午後にその関わり方(抱っこ)を記憶することが多く一度記憶吸収するとそれが絶対化されていきます。

赤ちゃんは、「感じる心。感じ取る心。気付く心。」は私たち以上にあります。体験経験がないために比較する対象がなく自分自身の体験がすべてになりやすいのです。そして、初めに記憶したものに色濃く自分の中に刷り込まれ吸収され一度記憶吸収したものが、思考の基盤になりやすく、次の体験が自分の記憶と異なるとき受け入れしにくく、もしくは受け入れできないのです。これが一つの典型的な自我が目覚める時の特徴です。



5. 赤ちゃんの「敏感期」の力

『参考文献：教育と脳 永江誠司・北大路書房引用』

敏感期とは

- ① 「敏感期」とは、学習効率の高い時期を指し、その時期を逃がすと、後でも学習は可能ですが効率は低くなる。
- ② 人間の発達に「敏感期」というものがあるのなら、その時期に子どもの生活環境を意図的、計画的、組織的に整え、準備して有効な刺激を与えれば大きな教育的効果をあげることが期待できます。
敏感期に適切な刺激が子どもに与えられれば、少ない経験のなかでも子どもの脳は効率よく、有効な神経回路をつくり、より長期にわたりそれを用いることができると考えられます。
- ③ 早期共用とは、学業優秀児に育て上げることを目的とした知的早期教育、子どもの才能を伸ばす才能開発的な早期教育と障害を持つ子供の学習に対処することを目的とした障害児の早期教育の三つに分類されます。

保育現場からの考察

- ・ 知的早期教育
敏感期における「自然からの助力」を生かし、その時期その時期にある「自然の助力」に寄り添い育てられた力は、人格を向上させる大きな力となり、ゆとりのある「心と能力」が構築されていきます。青年に達した時、日本社会に対しそして国際社会に対し「大きな役割」を果たす基盤となり、「土台」となる力となっていきます。
- ・ 障害児の早期教育
敏感期中に与えるプレイジム遊びによって、障害を乗り越え軽減する方向へと大きく導くことができます。早めに障害に気付く観察力が求められます。



6. 6か月までの「敏感期の赤ちゃん」の中に存在する大自然

「大自然には無駄がない。」ということを目にすることがあります。誕生直後の6か月間の赤ちゃんには、自然が、いっぱいあります。例えば、保育園に入り笑顔のない赤ちゃんから、笑顔を引き出そうとしても引き出せない現状があります。それは笑顔を引き出し構

築する時期の自然が異なるからです。

人が、生涯を生きていく基本的な表情は、誕生日からの3か月間で構築されており、笑顔は、生後1か月経った後の2か月間で集中的に育てます。赤ちゃんが、最も人に関心を持ち人の顔に注視する時期が笑顔を育む時期です。

赤ちゃんの心は、愛を理解する力を育むことで人としての心が形付けられていきます。赤ちゃんには、その時期その時期に「心の発達」のために存在する自然があります。

誕生直後の6か月間は、赤ちゃんの中に内在している自然を理解し赤ちゃんの心を構築していくことで、赤ちゃんは、「人となり」の姿になり、大自然の中に寄り添う溶け込む自然に寄り添った心が生まれます。全ての哺乳動物の中で人間だけが自分の足で立ち上がり歩き出すのに一年かかります。

赤ちゃんは、動き出すと目から入る情報が非常に多く興味・関心は、散乱し移行していきますので、心を構築しにくくなるからであり、そこに無駄はなく歩き出す前に動き出す前に、赤ちゃんを人としての愛を内在させ生きていく広い視野を構築し、宇宙を守るという責務を大自然から私たち人間には与えられていることを赤ちゃんを通して教えられ、私たち人間も自然の一部であることに気付かされました。

7. 「敏感期」は何の為にあるのか

保育現場から

私達、人間の中には人生でその時期にしかない「大きな力」が潜んでいる「敏感期」が「乳児期・幼児期・思春期」にそれぞれあります。

敏感期とは、生きるために必要な「心の力」が、生涯でその時期にしかない特別な力によって、将来必要となる「力」をその時期だからこそ小さな刺激を与えるだけで、「大きな気付き」を得て急激に発達する時期のことを言います。

長い一生でその時期にしかない「大きな力」があり、「生きる力」をその「大きな力」の「後押し」を得て飛躍させ構築させることができる唯一の時期です。

「敏感期」は、ひとつの「敏感期」一時期でその役割を終えるものでなく、それぞれの「敏感期」に繋げて、その年齢に寄り添い視野を広げながら育てる「一貫性」のある心の土台を育み「人」としての「人格」の完成を目指します。その「要」となるのが「赤ちゃんの敏感期」です。

「乳児期・幼児期・思春期」のそれぞれの時期の「敏感期」を生かして育てることで、人としての「生きる力」、平和の「和の力」、調和の「和の力」が、広がりを見せながら容易に育つように創られていた。そんな気がいたします。

8. 保育現場からの赤ちゃんの敏感期 体の成長と心の発

子供の敏感期・・・興味を持ち、同じことを繰り返す限定された期間



(モンテッソーリ教育より)

赤ちゃんには、「首すわり、お座り、ハイハイ、歩く」という体の成長があります。成長に伴い変化していく「視野、視界」があり、寄り添う心の発達があります。赤ちゃんの目に今何が写っているのか、赤ちゃんは、目に入ってくるものを「中心」にして心は発達していきます。

② 「誕生から首すわり(3か月)」までの時期と「首がすわって(4か月)からお座り(6か月)」までに、ある目から入る情報は大きな違いがあり、体の成長と心の発達は、切り離して考えることはできなく密接に関係しています。赤ちゃんは、母親の胎内で自然に成長し生まれてきましたが、心は、その時期その時期の「視野・視界」に寄り添った環境を与えることで、赤ちゃんは、気づきを得ながら発達をしていきます。そして、どの赤ちゃんにも皆、共通した発達が準備されています。

◎ 脳科学では、この時期を赤ちゃんの「敏感期」と名づけられています。この時期の大きな力を引き出し心の育みをすることで、子ども達は、愛を理解する力が、生まれてきます。愛は広い視野を生み出し「平和」の和の力「調和」の和の力が構築されていく基盤となります。そして、やがて赤ちゃんが、青年に達し「社会を」担う時、その力は国際社会での発言力に繋がり、地球を構築していく土台の力となっていくことでしょう。

9. モロー反射を理解しながら

心の方向性を形付ける《重要》



赤ちゃんの心を育てる時、赤ちゃんは、モロー反射の作用が強くありますので、どのような作用があるか赤ちゃんの心を想像するやさしさが求められ、この作用が、赤ちゃんの発達に影響を与えない導きが必要です。

(1) 赤ちゃんは、母親の胎内にいた時と、自分の誕生後の「手・腕」の動き方の違いに、不安や恐れがありとつさに「びくっ」として驚いたように反射し、天井方向に「手・腕」

を伸ばしていく動作がしばしば見られますが、母親の胎内にいた時のことを「記憶」している行為です。

- (2) 赤ちゃんは、誕生から1か月位を経過すると、日中、目を覚ましている時間が多くなりますので「モロー反射」による不安がより大きくなっていきます。

母親の胎内にいた時と自分の手の動きが「何故違う」のかが全く理解できなく不安は、「恐れ」となり「モロー反射」の形になり現れてきています。

不安を取り除こうとする「意識」が大きく働いていますので誕生から1か月经った頃の赤ちゃんに関わる時は、赤ちゃんの心を見つめながら未来に繋がっていく心をも見つめなくてはならず、この時期の赤ちゃんが、抱えている不安と恐れを早く忘れてさせていく心の転換を導く毎日の過ごし方が大変重要になってきます。

- (3) 赤ちゃんの心の方向付けは、生後1か月经った後の2か月間が重要であり「自立」に向かっているのか、「自己中心的な甘え」に向かうのか、「二極化の原点」があります。そのことを育てる側は強く意識しなければなりません。

欧米諸国が別室になり、赤ちゃんの心を構築する一つの目的がやはりこの時期に育まれていく赤ちゃんの心を非常に重視しているのかと思われま

- (4) 生後45日頃になると自分の力で遊びながらモロー反射を忘れていく力が赤ちゃんの中にはあります。それまでの間は、なるべく抱っこは、他のスキンシップに置き換えて遊ぶ工夫をします。

「ベビーマッサージ」や「お歌を歌ったり」「お話」をしたり「笑顔の育み」をしたり「メイ」をじっと見つめ「見ること」の能力を高める練習をしたり放置ではなく、抱っこに変わる関わり方に変えます。保育者と目と目を見つめ合っている遊びは、赤ちゃんの心の発達は見目で見て吸収する情報が多くあり、心の発達に繋がっていきます。

また、体験からですが同じような抱っこのされ方が三日間続くと三日目になると抱っこを記憶し、抱っこをされていればモロー反射からくる不安が遠のき少し安心するので、日中の過ごし方として基軸にする赤ちゃんの心が生まれてきます。

しかし、この時期に「抱き癖」がつくと6か月間だけ自然から折角、用意されている赤ちゃんの生きる力を育むための「偉大な力」脳科学は、赤ちゃんの中に眠ったまま十分に引き出せないまま6か月の敏感期は通りすぎていきます。

- (5) 赤ちゃんの心を育てる時、赤ちゃんの心は生涯で最も「シナプス」が構築され、生きる力の原点が育まれていることを十分に理解し、赤ちゃんの「人格」の始まりを育てる事を意識して赤ちゃんとの関わりを持つ必要があります。

誕生からの1か月经ったあとの2か月間が、赤ちゃんのこれから生きていく人格の原点の始まりであり、赤ちゃんの心は「乳児期→幼児期→児童期→思春期→青年期」へと繋がっていく基軸です。

赤ちゃんの心は、未来に繋がっていく様々な感情があり、感情は、赤ちゃんの考え方を将来の思考の形を大きく後押しする力となることを重視し、赤ちゃんの心の方向性を育てているということをしっかりと見守り、見つめていく観察力と洞察する事が大切です。日々の赤ちゃんの感情の現れ方が赤ちゃんの将来の人格を育んでいます。

10. 敏感期中(誕生～6か月間)の赤ちゃんの心の発達



生涯に繋がる「基軸」となる心が、どんな育てられ方をしてもその育てられ方が「ジナプス」となり、思考(感情)の方向性が、構築され生涯へと繋がっていく始まりとなる大変重要期である。

- ◎ 赤ちゃんの心は、「愛」を理解する心を育みながら発達します。愛を理解する力は、「青年期」になった時の思考し発信する力」に繋がっていきます。
- ◎ 敏感期の6か月間は、一か月一か月異なる育つ心があります。その心が、育っている時にその心が育つための環境を与えることで赤ちゃんの心は敏感期ならばこそ飛躍的な発達をします。

11. 笑顔の構築

2か月・3か月



(1) 笑顔で心の扉を開く

赤ちゃんには、人の顔に集中しやすい時期があり、その時期は、体の体勢も顔に集中しやすく、心と体がまるで一体化したかのように顔に集中する時期です。赤ちゃんの心は、笑顔によって扉を開き、笑顔は誕生から1か月经ったあとの2か月間が構築時期です。

4か月に入ると笑顔の育みは、容易ではなくなり笑顔を全く見たことがない赤ちゃんから笑顔を引き出すことは困難になっていき、赤ちゃんは、笑顔がないという表情が徐々に固定されていきます。

人は、表情で人格を押し量れることもあり、笑顔は、人間関係を円滑にしますが、笑顔とひと口でいっても様々であり、一瞬ですぐに消える笑顔もあり、また笑顔の余韻がいつまでも心の中に残り、幸せを導いてくれることもあります。

笑顔の「幸せ余韻」は他者からの「愛」を理解をするための、「後押し」となる大きな力が含まれています。

この時期は、赤ちゃんの「溢れんばかりの笑顔」を容易に引き出せる「自然の力」が潜んでいる時期であり、人格を育むひとつの重要な入口となります。生後2～3か月で引き出された笑顔は生涯の笑顔の基盤になり、赤ちゃんの人生を「益」の方向性へと導いてくれる手段のひとつです。

(2) 笑顔を育む時の注意

笑顔は、自然に出てくるものではなく自分の目で他者の笑顔を見て初めて笑顔を知り感じとっていきます。笑顔を見たことがない赤ちゃんからは、笑顔を引き出すことはできません。

誕生からの3か月間の間に赤ちゃんが、自分で他者の笑顔を見て感じ取ってきた表情が、赤ちゃんの表情を育み笑顔を育みます。

4か月に入ると新たな笑顔は構築しづらく、それまでに体験し、経験してきた表情が、赤ちゃんの表情となり笑顔も固定化されていきます。

(3) 4か月に入ると愛を理解する力が出てきます。

3か月までに育まれてきた笑顔や集中力が、赤ちゃんが「愛」を理解していく大きな力となっていきます。



12. 「愛」を育む

4か月～5か月半



20年後の未来を「生きる力」、未来を構築する力は、赤ちゃんが生きていく時代に欠かせない「共存して生きる力」人が、人の心を持ち「調和」を保ち「自然と共生」し生きる「愛」

赤ちゃんの「和の心」の土台は、この月齢が容易に育ちます。6か月に入ると自我が強くなり吸収されにくくなっていきます。誕生直後の「柔軟」で「純粹」で「無垢」な心で理解する「愛」は特定の人に対する「愛」ではなく、全てに繋がる新しい時代に寄り添う「魂の愛」です。

赤ちゃんは、「愛」を保育者の心から学びます。「表情・声・仕草」に注視し「感じ取り気付く力」があり、自分の目で見て感じたことを自分の心に「まるで鏡に写したかのように、強く染み込ませる力」があります。そして、その心はその場限りで終わるものではなく赤ちゃんの心に定着していきます。

ミラーニューロン(脳の神経細胞)



共感細胞(1996年 パルモ大学 <イタリア> ジャコモ・リッツォラッティ)

共感細胞の作用があるとしか思えない愛を理解する鋭い直感力があり、生きるための力を育むために

【自然からの大きな応援となる力】
が赤ちゃんの中には潜んでいます。

私達の多くは、経験・体験が積み重なり愛を理解する力が生まれていきます。しかし、この時期の赤ちゃんは、すでに潜んでいる大きな力が働き 引き出されていくかのように愛を理解していくのです。

自然は私達に生まれた時に育むために必要となる力を、応援となる大きな力を用意と与えているのです。

13. 『ニューズウィーク日本版 2007.7.25』より

「生後 6 ヶ月までには脳内の回路が強調へ」とあり



「生後 3 か月の脳は色々な楽器が勝手に音を出している状態だが生後 6 か月になるとオーケストラが始まる」とあります。



保育現場からの考察

3 か月までの赤ちゃんは、「笑顔の構築」と「プレイジム遊び」は、それぞれ独立した発達です。4 か月に入ると二つの発達が重なり合い、他者からの愛を理解する「力」となります。

『ニューズウィーク日本版 2007.7.25』より

米国立早期教育研究所 スティーブン・バーネット 所長

「恵まれない子供たちに適切な幼児教育を受けさせれば、10 年後から 20 年後に犯罪を犯す可能性を減少させるかもしれない」とあります。



「早期教育と社会」〈保育現場から〉

赤ちゃんは、4 か月に入ると環境を与えられることで愛を理解する能力があります。一度、理解した「愛」は、「幼児期→児童期→青年期」へと繋がります。愛を理解する「力」は、確実に「犯罪者」を減少し、「いじめ」も減少させます。

6 か月までの「敏感期」の早期教育は、生涯へと繋がっていく、心の方向性を構築し社会を改善する一つの大きな手段となります。

14. 保育現場からの思春期に繋がる赤ちゃんの「愛着」

愛着の形は

<1>自立型愛着 <2>依存型愛着 <3>虐待型愛着 <4>ネグレクト虐待に分かれます。

- (1) 誕生直後の6か月間で基軸が育ちます。
「愛着」とは赤ちゃんが、自分と最も身近にいる人との「人間関係」が現れたものです。赤ちゃんが、人として生きていく人との関わり方の原点が構築されます。
「喜怒哀楽」のそれぞれの感情がどのような大きさに発達していくのかは、愛着の形と密接な関係があります。
- (2) 赤ちゃんの両親からのもって生まれた性格は、そのまま引き継がれなく持って生まれたものを軸として 誕生直後にの6か月間に与えられてきた環境が重なり合い、生じてきた気質気性などの性格こそが、長い人生を生きていく赤ちゃん自身が背負う原点となると 性格であり愛着を形付けします。
- (3) 愛着は、赤ちゃん側から見ると環境が主体となり受身です。育てる側がどのような環境を赤ちゃんに与えてきたのかが重要であり、保育者の育て方が表面化したものであり、赤ちゃんは、受け身の形で形づけをされていきます。
愛着を形付けしていくのは、保育者の育て方と赤ちゃんの気質気性が重なり あい構築されます。誰が育てたかは残らなく、どのような育てられ方をしてどのような感情が引き出されたのかが、愛着の形づけをします。
- (4) ここでは「愛着」が、4方向へと導かれていく方向性を見つめ形付けをしましたが、それは、乳児期から幼児期へと移行する時の方向性であり生涯続くとは限りません。
人の一生は長く生涯様々な事に出会い気付きを得て思考の方向性は、変化し続けます。赤ちゃんの時に育てられ方によって構築された絆の形は、赤ちゃんの「人間関係」の「基盤」となり思春期に繋がられて行きます。

15. 感情は生涯に繋がっていく「愛着」の方向性を導く

「喜怒哀楽」の感情の土台は「敏感期」の6か月間で育つ

- (1) 「喜」1か月⇒3か月
笑顔の構築をしながら「喜」の感情を引き出します。
赤ちゃんは、人々の笑顔から「喜び」を感じています。一瞬で消えていく笑顔ではなく「幸せ余韻」が残る笑顔を構築します。
笑顔は、赤ちゃん自らは構築できなく、自分の目で人々の笑顔を見て、保育者の笑顔を見て初めて知ります。
赤ちゃんは、人々の表情を模倣することで自分の笑顔を構築していきます。笑顔を見たことのない赤ちゃんから笑顔を引き出すことはできません。
人の顔への集中力は、生後2か月が最大であり、4か月に入ると笑顔がないと言う赤ちゃんの表情が固定化されていきます。
全く笑顔を見たことがない赤ちゃんから、笑顔を引き出すのは時間がかかるようになります。容易ではなくだんだん困難となっていきます。笑顔は、「生後3か月」までの育みであり、5か月前後になると愛を理解する「大きな力」となります。

(2) 「楽」 1か月⇒6か月

◎ 人々から受ける刺激、プレイジムによる一人遊び

① 「人々からの対応によるお歌遊び」

童謡で赤ちゃんの心の発達を刺激しますが、将来「益」となる心を育み、誘導する遊び方があります。

② 「プレイジムのオモチャ遊び」

生後45日頃からですが、赤ちゃんの将来、「益」となる心の発達を誘導するために初めに取り組む時の遊び方があります。

オモチャによる目と手の協応した遊びによる『能動的な集中力』は、夢中になることで「楽しさ」を重ねていきます。

また、能動的な精神活動を日々重ねていくことで、その集中力は、「愛」を理解するための「大きな力」となっていきます。

抱っこでは、赤ちゃんの心に幸せ余韻が残る笑顔を構築しづらく、また、抱き癖のある赤ちゃんは、抱っこでプレイジムで一人遊びがしにくく、能動的な主体性のある心が引き出されにくいです。

(3) 「怒」 4か月⇒6か月

抱き癖

抱き癖のある元気な赤ちゃんから引き出されやすい感情です。

4、5か月頃になると 日中起きている時間が多くなり、保育者は、全てを抱っこするのが難しくなります。

保育者の対応の変化に戸惑い、悪さに「怒り」始める赤ちゃんもいます。短気で怒りっぽい心を引き出す要因となりがちで、また、目が覚める度に約7、8か月間抱っこを求め続けてきたので、他者に甘える心が引き出されやすく、他者の心を見つめる心の広さが育ちにくくなります。

(4) 「哀」 5か月⇒6か月

抱き癖のある赤ちゃん

抱き癖の赤ちゃんが、抱っこされない時に引き出されやすい感情です。またこの時期から保育者が変わり、他者に預けられ始めた時、不安からの「哀しみ」が引き出されていきます。

この月齢は、保育者との絆となる人間関係が構築された直後であり、他の月齢よりも哀しみが大きく引き出されていきます。

(5) 「恐」 1か月⇒6か月

虐待されている赤ちゃん

虐待されている赤ちゃんから引き出されていく感情です。

赤ちゃんは、1か月からの6か月間、同じ虐待であっても心の傷となる深さは 様々な時期がありますが、特に誕生から1か月经ったあとの2か月間は潜在意識として残ることが懸念されます。赤ちゃんの心には、人に対する怯えが刷り込まれており、他の赤ちゃんと人に対するメッセージが全く異なることを理解する必要があります。

16. 「自立型愛着」

脳科学に寄り添う「愛着」



- (1) 脳科学の発達によって赤ちゃんには、生涯で誕生直後にしかない特別な力があることが証明され、その力を「生きるための力」として寄り添う育みをすることで人としての心の方向性が、容易に導かれ、飛躍的な発達を促します。幼児期の子育ては積み重ねになりますが、赤ちゃんの時の「敏感期」は、すでに赤ちゃんの身に付いているものが、「引き出されていく」そんな「イメージ」があるほどに環境を与えてあげることで、赤ちゃんの中に眠る力が、容易に引き出されていきます。
- (2) 誕生直後の敏感期の6か月の中には、色々な力の時期があり、その時期によって赤ちゃんの中に眠っている「生きる力」は全く異なります。その力に寄り添い、その力が「存在する時に環境を与えてその育つ力」を育てます。
- (3) 愛着の方向性
心の育つ時期と順序を理解した育みによって赤ちゃんの引き出されていく感情があり、その感情によって構築されていく「絆」があります。赤ちゃんの時に構築されていく絆の形にも様々な形があり、絆の形は、一時的なものではなく、そのまま幼児期へと繋がりやがて思春期にまで届きます。赤ちゃんの時に自立の心が育ち、他者の心を理解しようとする視野がある「愛」のある絆が導かれながらの絆は、双方のものであり成長の先を見つめた時、親からの一方的な「愛」に片寄らないことで互いに尊重し合う健全な関係性を保つことができます。
- (4) 構築されていく人格
 - ① 穏やかな心思いやりのある優しい心、愛を理解する心の土台が育まれていくことで、抱っこを感謝する心の方向性が導かれていきます。
 - ② 自立した自我が育ち視野が広がりをみせ、一つの考え方に執着しない何通りもの思考が、構築できる人格へと育っていく方向性が導かれていきます。
 - ③ 自分の行動を判断し決定する力や、計画を立てて実行する力が導かれます。
 - ④ 自然な我慢力の下地が生まれ、感情をコントロールし判断する力の方向性が導かれます。
 - ⑤ 母親の話にしっかりと耳を傾けられる子へと育っていきます。
 - ⑥ 6か月間、人々とのかかわりやプレイジムの遊びによって、構築されてきた赤ちゃんの思考回路網の集中力は、将来、赤ちゃんが、どのような人生の道を選んだとしても「益」となる方向性へと後押しが出来る「大きな力」となる貯蔵庫のようなものとなります。

⑦ 物事を自分の頭で自分の言葉で 自立して思考する方向性の力が育まれ、9歳の頃に見られる9歳の壁は、感じられない方向性へと導かれ学習面において自力で乗り越えていく力の方向性が、導かれ精神面においても「社会性と共感力」を育む導きとなります。

⑧ 赤ちゃんのこの力は、人々に「平」で「傾」がない優しい思いやりのある愛で「地球温暖化」や将来「AI」による産業革命に寄り添う「想像力」と「創造力」を生み出し「平和」と「調和」を理解する土台が構築され、日本を支えていく 大きな力が導かれていきます。

17. 「依存型愛着」

抱き癖を中心に育った時の心の発達に「寄り添う」愛着



(1) 抱っこを中心に赤ちゃんから引き出された「感情、気質」が「軸」になり、主に母親との関係性による愛着です。

日本の子育ては、長い間「抱き癖」の文化によって支えられてきました。抱っこは赤ちゃんへの同じような応対が、3日以上続いた時「モロー反射」に表れる本能不安を抱えている赤ちゃんは、安心を求めて、目が覚めた時の過ごし方として受け入れるようになり抱き癖へと変化します。

母親の腕の中で抱っこされている時期は「ハイハイ」で自分の力で動き出し、気分転換ができるようになるまで続きます。個人差はありますが、7か月以上続き敏感期はそのなかにすっぽり入っています。

(2) 「愛着の方向性」としては、目が覚めるためたびに7ヶ月間も抱っこを求め続けていたことから、自分が、される「抱っこ」を何よりも優先し、自分を中心とする心が芽生え「抱っこ」は、当然の権利のように思う「依存と甘え」が構築されやすく成長するに従い自分の権利となる対象は変化しますが、依存と甘えは形を変えて残ります。

(3) 脳科学によって誕生直後の赤ちゃんには「特別な力」があることが証明されましたが、その時期、赤ちゃんは、母親の「腕の中」で育つ時期と重なっておりますので、せっかく誕生した時に用意されていた「脳の神経細胞」は、抱っこを求め続けてきた心が色濃くつながります。

本来ならば将来「益」となる能動的な体験を充分にして「生きる力」に繋げなかったのですが、6か月の終わり頃になると、どの赤ちゃんも日々の目に見える発達がなくなることで、繋がらなかつた脳の神経細胞は刈り込みの作用が始まっていることがわかります。

抱っこでは、将来「益」となるための経験不足は否めなく残念でなりません。

(4) 5か月に入ると赤ちゃんは、目を覚ましている時間が増え、体重は、増加し抱っこは大変です。

家事はしづらくなり、母親の負担は月齢を増すにつれて多くなりますが、赤ちゃんは母親の事情を理解することはできなく抱っこをすぐにしてくれなくなったことに、戸惑いを感じています。

中には、顔を真っ赤にして大泣きをする赤ちゃんもいますが、悲しみが怒りへと転じたものです。

赤ちゃんにしてみれば「奈落の底」に落とされたような悲しい思いをしています。「わがまま」ではなくその過ごし方しか知らないのです。

赤ちゃんにしてみればこれからどうなるのだろうかという未知の大きな不安を抱えています。

抱っこは3か月までの育みがあり、それを終えてから4か月に入ってから首が座っての育みです。いくら抱っこをしても、4か月に入ると抱き癖はつかなく「抱っこをしてくれてありがとう」という感謝を導く方向性への「愛」の育みが始まります。3か月までに愛を理解する「基本的な心」土台を育ててからの育みです。

(5) 構築されていく人格

- ① 母親の愛を理解しにくく、当然の権利のように勘違いをする。感謝の心は育ちにくい
- ② 見通しを立てて物事を計画する力が育ちにくい
- ③ 自己中心性が強く「おこりっぽい」「短気」になりやすい

9歳の壁の方向性が、導かれやすくなり9歳になると学習面で算数の割り算や、分数、文章を理解したり漢字を覚えるなどを乗り越える力が自立型の赤ちゃんよりも必要になってきます。繰り返し繰り返し本人の要望である抱っこをすぐに受け入れてきたので、本人にしてみれば赤ちゃんの時に、乗り越える壁を低く設定されてしまったのです。

赤ちゃん時の心は

【乳児期⇒幼児期⇒児童期⇒思春期】へとずっと繋がっていく始まりです。

生後2、3か月の赤ちゃんからどのような心を引き出してきたのか、その心を思い出してください。それが、その心が9歳頃になり自分の力で乗り越えるしかない場面に直面した時に現れてきます。

赤ちゃんのシナプスが、人生最大に構築されている時期を「どのように」育ててきたかは育ててきた子どもが答えをだしてくれます。私が、かつて体験してきた保育現場では、「二極化」が現れてくるのは、生後4か月に入った時でした。

3か月までの育てられ方の違いが、赤ちゃんの遊びへの集中力や他者の言葉がけに対しての耳の傾け方に大きな違いをみせました。

それは、視野の広さであり物事に直面した時に、乗り越えていく力に繋がることでした。

9歳になり突然自分の力でひとり乗り越えなさいということは、突然、「今まで育てられてきた性格を一人で変えなさい」に等しいのです。

本人の心の中に子どもの心の奥深くに大きな『パワー』は、まだ眠ったままです。心は、「依存と甘え」の方向性で育っていますので「自分の力で一人で乗り越えなさい」と言われてもできないのです。

しかし、その力は、引き出しにいくだけで奥深くに必ずあります。

赤ちゃんの時とは、とんでもない比較にならない莫大な時間を要しますが、出しにいくだけなのです。

まだ眠ったままの力を引き出します。

周りの応援が必要です。

母親や父親の子ども心に寄り添う「愛」が必要です。

子どもを一人にしないで下さい。寄り添って一緒に乗り越えて下さい。そして此処で「乗り越えた力」は、そのまま「思春期」へと繋がっていきます。

18. 「虐待型愛着」

赤ちゃんの心の傷の将来



(1) 誕生からの6か月間の敏感期中に受けた

虐待による心の傷は、将来に様々な影響をもたらすことが懸念されます。

特に誕生から1か月経ったあとの2か月間を含んだ心の傷は深刻と言えます。

赤ちゃんは、経験も体験も全く無く純粋で無垢な心に、そして、「人のイメージ」を人生で最も構築している時期に、自分の最も身近の人から受けた心の傷は、人そのもののイメージとして吸収していることとなり、一人の人から受けた心の傷ではありますが、人に対する全体のイメージとして赤ちゃんの中に吸収されていきます。

例えば虐待の一つの例ですが、母親が、赤ちゃんを望まないで出産したとき、そのストレスを赤ちゃんにぶつけることがあります。母親は、これ以上のない恐ろしい顔をして、赤ちゃんを毎日毎日何度も何度も睨み付けるなどをした時、赤ちゃんに体の傷はありませんが、心の傷は、想像を超える深さがあります。

他の赤ちゃんと全く異なる人に対するイメージが構築されており、固定観念が激しく刷り込まれていそることを、周りの人々は理解をしてあげる必要があります。

(2) 4か月に入るとほとんどの赤ちゃんは「モロー反射」は見られなくなりますが、「心の傷」のある赤ちゃんは、6か月に入っても「モロー反射」が、消えずに残っていることがあり、誕生直後に「虐待で受けた」心の傷の深さは、「モロー反射」が、消えていく時期が、そのひとつ「目安」になります。

(3) 「自己中心的」ですが、依存型のわがままと質が異なる場合があります。

依存型は、裏がなく単純で誰にでもわかりやすいですが、虐待されてきた赤ちゃんは、相手からの強迫観念が、含まれていることがあり、複雑であり、赤ちゃんのする行為だけを見て判断すると誤解を生じることがあります。

(4) 懸念される将来

「愛」を知らないで育っています。

なるべく早い段階で人には、愛という心があることを「学べる」環境が必要となります。しかし、人間不信が、根底にあり生まれながらにしてその重荷を背負います。「自立型」と「依存型」は、人に対する憎しみや恐怖は、全く育ちませんが、「虐待型」は、人とは怖いもの。「いつ」自分に対し「害を与えるかわからない」と言う「常に人から自分を守らなければならない」潜在意識が、構築され怯えがあります。社会における人間関係の中で誤解を生じやすく、大きな問題へと発展しやすくなることも懸念されます。

(5) 愛着の形

自分守り保護してくれる人がいなく虐待する人を頼らざるを得ない愛着。
害されるかもしれないという怯えを秘めた愛着。

(6) 構築されていく人格

① 誕生直後の3か月までに受けた虐待は、脳が、人生で最も発達している時期と重なり受けた虐待は、必要以上に自己防衛をする人格を構築し、その自己防衛は、生涯へとつ繋がっていく潜在意識となりやすいことが考えられます。

② 内心は人を恐れており、人を信じることは容易ではありません。

③ 本人にしてみれば自分の思考の方向性と他者との思考の方向性の違いが、「分からなく」「基本的に人を信じられなく」過剰な自己防衛によって、人間関係を悪い方向性の思考へと導きやすくなることが考えられます。

④ 思春期の敏感期に人とは、様々であることを教えるために「真実の愛で」包み込まれていく体験が重要です。

19. 「ネグレクト虐待」

無関心による放任

- (1) 親は、虐待をしているという意識は少ないことが多く、放任ということで、子どもは必要な援助してもらえないで、育てられた時のことを言います。



親は、子どもの発達の遅れをみても、子ども自身に何か問題があることを指摘し、他に原因を見つけだすことの努力をしたり、自分の責任であることの認識は薄いことが見えてくることがあります。

子どもは放任していても、自分の力で勝手に育っていくものという勘違いをしていることがあります。

- (2) 直接的な子どもへの身体における虐待はなく、放置されたままであったので、心はまだ未発達のまま濃い色に染まっていなく「敏感期中」の2か月という時間のゆとりがあれば、幼児期に入るまでに「自立型愛着」へと導くことが出来ます、片寄った育てられ方をされていない時は、育て直しがしやすいです。
- (3) 援助不足で過ごした時、感情の「未発達」と「手・指」の技能の遅れなどが懸念されます。赤ちゃんは、何もわからず発達のためには「細かな」援助が必須であることの早めに親指導が求められますが、親を変えることは難しく子どもの人格を尊重し、社会の介入と援助を必要とすることがあります。
- (4) 愛着の形は、人当たりとしては一見、自立型の赤ちゃんに似ていますが集中力に大きな違いがあり、遊び方に違いが出ます。一般的な赤ちゃんであり外見ではネグレクトをされているかどうかは分かりにくいです。親子の感情のやり取りを時間をかけて見つめる必要があります。

20. 敏感期の赤ちゃんは人格の原点

育っていく「感情」は「人格」を導きます

欧米の育て方を覗き見させて頂きますと「主体性」を重視することもあり、赤ちゃんは別室が主流になっています。「ベビーモニター」によって様子を見守り、赤ちゃんは母親からの「対面式保育」によって、目と目をしっかり合わせて互いに見つめ合い赤ちゃんは「笑顔と優しさ」に包まれ、「愛と安心」を与えられます。

日本の「抱き癖」は「抱っこ」をすることが先行し、その先は不明瞭です。私は、体験から「対面式保育」は「抱っこ」よりも、短時間で「深い絆」を育むことを実感しています。また、「深い絆」や「主体性」は、別室でなくとも保育者と同室で母親の側で「安心」を与えながら、育むことができることを保育現場で体験してきました。

「抱き癖」は、赤ちゃんが「ハイハイ」で動き出すまでの「7、8か月間」続きますので、大変重要視される「敏感期」は、その中に入り重なっています。折角、誕生した時に用意されていた「敏感期」だけ存在する脳の神経細胞は「抱っこ」では経験が乏しく、将来「益」となる細胞が十分に繋がらないまま消失することが多いのです。

子ども達の学習における「二極化」が問題視されていますが、そのひとつの要因として「敏感期」の過ごし方の違いが考えられます。

「敏感期」は能動的な「生きる力」を容易に引き出すことができます。また、「敏感期中」にいる赤ちゃんが、母親との関わりの中で引き出していく「感情」は「シナプス」となり、赤ちゃんが、これから未来に向かって引き出していく「感情」の「土台」となり、また、「視野」となり、赤ちゃんの「人格」を導き、司っていく原点であり「基軸」です。

21. 終わりに

【私がお伝えしたいこと】



この書は私の体験、経験に基づく報告です。

育て方の違いによって生じてくる「人格」の違い、将来どのような「人格」が想定されるのかをお伝えしたかったのです。赤ちゃんの「人格」がどの方向に向き、向かって育てているのかを、全く知らずに育てていくのではなく、その方向性をご理解して頂きたかったのです。数えきれない無数の育て方があり、育っていく方向性も無数にあります。赤ちゃんを育てていく時、「シナプス」が人格を構築していること、そして「シナプス」は誕生直後が人生最大に一挙に構築され、それは決して一時的なものではなく、『乳児期、幼児期、児童期、思春期、青年期』へと繋がっていくことを知って欲しいのです。

赤ちゃんが「7、8か月」もの長期に渡り、目が覚める度に「母親に抱っこされたい」という「自我」が芽生え、それが「能動的」なものとなり、固定化され繰り返し育っていった時、そこに赤ちゃんの人格にとってどのような作用があり「方向性」を導き、心を構築しているのかを振り返り気付くのではなく、育てながら日々の赤ちゃんを見つめて、育てている時に赤ちゃんから知って欲しいのです。

赤ちゃんの「シナプス」の構築は、赤ちゃんの自らの意思では構築できません。赤ちゃんにしてみれば、与えられた環境に寄り添っているにすぎません。赤ちゃんの「シナプス」は育てている側が構築していることを、知って欲しく気付いて欲しいのです。

時代が大きく変化しています。子ども達は新しい社会の中で、かつて人が経験していない未来を一人一人が背負います。『力強く生き抜く生きる力』の土台となる方向性を最も容易に育んであげられるのが、「誕生直後の敏感期」です。

一人一人の子ども達が皆、それぞれに「幸」を手にし、落ちこぼれていく子がない社会を目指していけたらと願っています。

